『雲隠六帖』伝本二系統各本文の特色（一）

――基本的な性格の差異――

小川陽子

はじめに

『源氏物語』の続編として書かれた物語のひとつである『雲隠六帖』の現存諸本は、二系統に大別される。すなわち、版本およびその書写本を中心とした系統である流布本系と、写本のみで伝わる別本系の二つである。[1] その相互関係について従来の研究では見解が分かれていたのであるが、[2] 稿者は、一方の系統から他方が派生したのではなく、共通祖本からそれぞれ独自に発展したと考えるのが妥当であることを別稿にて論じている。[3] そのように二系統の関係をとらえた場合、次に問題となるのは、各系統がどのように本文を改変しいかなる方向に物語を発展させたか、それによって二系統がどういった差異を持つにいたったか、という点であろう。そこでまず本稿では二系統の基本的な性格の差異を押さえ、稿を改めて物語の表現性の差異と各本文の特色を考えることとしたい。

一　五つの誤脱箇所 ―流布本系の特色（一）―

物語が伝流し享受されていく過程では、必ずしも意図的な改変ばかりが新たな本文生成の要因となるわけではない。人の手による書写という手段を用いる以上、誤脱や誤写をまぬがれることはできない。このようないわば偶発的なミスを意図的な改変とは弁別して論じていくことの重要性は、本物語よりもはるかにバリエーション豊かな本文群を有する『狭衣物語』の研究においてすでに説かれているとおりである。[4] 二系統の差異とその意味を考察する第一段階として、まずは大きな誤脱箇所を押さえておきたい。

【誤脱一】[5]

㊀惟光か子に惟秀とて、御かたはらさらす、かげよりけにめしつかうまつり給へる、たゝひとり、御随身をかへと御前はかりにて、むかしおほゆるあしろ車のなれたるにしたすたれかけて、「たゝすはかりにもの聞ゆべき」とて出給ふ。（雲隠一オ・4）

㊁惟光か子にこれひでとて、御かたはらさらす、めしつかはせたまふをそ、只一人御すいしんにて、又をかべとて、としころむつましくしたまふ御ぜんはかりめしくして、むかしおほゆるあしろ車のなれたるにしたすたれかけて、「たゝこゝもとに人に物きこゆへきを」とて出たまふ。（雲隠一オ・5）

光源氏が深夜に邸を出る場面。供人として選ばれたのは惟秀とをか

べの二人であった。光源氏とあわせて三人での出立という点では両系統に違いはないが、その描写に異同が見られる。別本の場合、随身として惟秀ただ一人、また御前駆としてをかべだけを連れたということですんなり解釈できる。これに対し流布本の場合、「たゝひとり」が惟秀とをかべどちらを指すのかがわかりにくい。言葉のつながりから見て惟秀ととるのが穏当かと思われるが、その場合「たゝひとり」がどうしたのか、主述がうまく対応しない。この一文は末尾に「出給ふ」とあるから、光源氏が主体である。とすれば光源氏が惟秀一人を随身とし、またをかべという長年親しんだ御前駆だけを召して出立した、という別本のあり方が本来と見るべきではないだろうか。流布本は「としころむつましくしたまふ」という箇所を誤脱し、そこに若干の修正を加えた結果、現在の形となったものと考えられよう。

【誤脱二・三】

流 ①うちのみかとおはしましかばと（おわ）みかと・きさき御心のはるゝよなく、恋かなしませ給ふける。かぐで御国ゆつりの事ちかくなるを、②二の宮東宮に一御くらゐなとさらにのそみ給へらるゝ御こゝろなし。ことにさえなといふ事たとくしさなり（きわ）。おなし御事、三の宮を御子（皇子カ）にはさためたてまつり給へ」とのたまへは（巣守四オ・7）

別 ①うちの御かどやうくおりゐの御心ちかくなり給ても、一あはれ二の宮のおはせしかは（未記カ）」と御かと・后御心のはるゝよなくそ、こひかなしひ給ける。御くはゆつりちかくなるを、②二の宮とうくうにゐたまふへきよし、くせんおはしけれは、春宮一むかしより位なとさらにのそみなし。ことにさえなといふ事いとたとくしきなり。おなし事、三の宮を御子（皇子カ）とはさためたてまつりたまへ」との給へは（巣守五オ・7）

①②の近接した二箇所に問題のある場面。まず①であるが、別本では「内裏の帝」（＝今上帝）に譲位のお気持ちが芽生えるにつけ、〈二の宮〉が生きていらっしゃったならと帝・后が恋い慕う、という文脈で、続く国譲の話題へのつながりもスムーズである。これに対し流布本は、生きていらっしゃったならと帝・后が恋い慕う相手が「内裏の帝」となって文脈が通らず、[6] さらに唐突な国譲の話題へとつなげるために破線部「かくて」という接続詞を要している。後述するように、「かくて」あるいは「さても」といった話題の転換点を明示するいわば説明的な傾向は別本に強く、流布本のみがこの語を持ち別本が欠くという箇所は当該例のみである。ここは、このような例外的な処理をせざるをえないほど、文脈が不自然であることを表しているともいえよう。別本のような形が本来であり、流布本の形は誤脱の結果と考えられる。

続く②は皇位継承に関するやりとりの一部である。まず別本の場合、〈二の宮〉を次の東宮にという口宣があったところ、現東宮（＝今上一の宮）が、自分は帝位への望みはなく才もそしいため三の宮

（＝匂宮）を帝とするよう進言する。物語の展開上、（二の宮）という箇所が問題であるがこれは後述することとし、文脈だけを考えれば、譲位を目前にしての現東宮による帝位辞退の言葉として十分理解できる。ところが流布本になると、二の宮が東宮に対し、帝位への望みはなく才も乏しいのだから同じことなら三の宮を帝に、と進言するのである。これでは現東宮の意向がどうであるかを全く無視した形で二の宮が勝手に三の宮（＝匂宮）への譲位を進めたこととなり、明らかに文脈が混乱してしまう。ここは①と同様、別本が本来の形であり、流布本は誤脱を起こしたものと考えるべきであろう。

ここでもう一つ問題となるのが、先にも触れた「二の宮」である。①②ともに別本が本来の形と考えると、ここは、今上が譲位の気持ちを固めるにつけ「二の宮」の死を嘆くも譲位の時が近づき、「二の宮」立坊の命が下るが、現東宮の辞退により三の宮すなわち匂宮への譲位が進められるという文脈となる。しかしそれでは「二の宮」の死に対する嘆きと「二の宮」立坊とが同時に語られることとなってしまう。二箇所の「二の宮」のうちどちらかが誤写と見なければなるまい。

①の「二の宮」を本来とる場合、今上二の宮がすでに死去していることとなる。しかし『源氏』本編において今上二の宮が最後に姿を見せる蜻蛉巻では、

后の宮の、御軽服のほどはなほかくておはしますに、二の宮なむ式部卿になりたまひにける。重々しうて、常にしも参りたまはず。（蜻蛉⑥二四五）[7]

と語られ、死去の記事は見えない。また逆に②の「二の宮」を本来とる場合、「二の宮」が立坊、すなわち今上→現東宮→「二の宮」の順に帝位が移るよう定められたということになる。その状況下において現東宮が自らの即位を辞退することはともかく、次の帝と定まったばかりの「二の宮」をさしおいて三の宮（＝匂宮）への譲位を進言するというのは無理があろう。すなわち、二箇所の「二の宮」はそれぞれに問題をはらんでいるのである。

しかし物語の展開を考えた場合、より問題となるのは②の「二の宮」である。ここで今上から匂宮への譲位という展開に揺れがあっては匂宮帝の御代の物語である後半三巻へのつながりが危うくなってしまう。とすればここは、本来「三の宮」すなわち匂宮の立坊が描かれていたのではないだろうか。「二」と「三」の誤写は容易に想像がつく。今上二の宮がすでに亡くなっている状態で現東宮が即位となれば、次なる東宮が今上三の宮すなわち匂宮とされるのは当然である。この直後に、

もとよりしたの御こゝろにもさあらまほしう、みかと・后とし比の御こゝろまゝにて三の宮に御国ゆつりさたまり給へり。（巌巣守四ウ・9）

と語られるように、『源氏』本編において今上と明石中宮は匂宮をいつか帝位にと考えていた。[8] しかしそれはあくまで一の宮（現東宮）、二の宮の次としての希望であったことは、

二の宮も、同じ殿の寝殿を時々の御休み所にしたまひて、梅壺を御曹司にしたまひて、右の大殿の中姫君を得たてまつりたまへり。次の坊がねにて、いとおぼえことに重々しう、人柄もすくよかになんものしたまひける。（匂兵部卿⑤一八）

という記述から確認できる。

先にも述べたように『源氏』本編において今上二の宮の死去が語られておらず問題ではある。しかし『雲隠六帖』は、たとえば雲雀子巻における薫の小鷹狩の逸話のように、『源氏』本編には見られない記事をあたかも五十四帖のどこかに書かれていたかのように取り入れるという姿勢が見える。この場面においても、匂宮の即位を実現させるために、二の宮はすでに亡くなっているという設定をしたのであろう。譲位を思い立った時に、かつて次の東宮にと考えていた二の宮が今は亡いことを思い、生きていらっしゃったならと恋い慕いつつ、それが叶わぬ今、三の宮（＝匂宮）を東宮にとの命を下すという今上と明石中宮のあり方、さらにはそれを制しての現東宮の帝位辞退と三の宮への譲位進言という物語の展開は自然なものといえよう。

以上から、①②ともに別本が本来の形をとどめているものの、二度目の「二の宮」は両系統ともに「三の宮」の誤写であるととりたい。二系統が分立する以前のかなり早い段階から「二」と「三」の誤写は起きていたものと考えられる。

【誤脱四】

㊱これは内のおとゝのしのひくの御こゝろさしなりしかは、おとゝも「あらまほしきことにこそおはしけめ」なと、ほいの事おほしけるを、「かくおもはすに、なやみわたり給ふといふほともなく成給ひし事」とてこかれかなしみ給ふ。（法の師二オ・10）

㊲これはうちのおとゝの小さいしやうのはらのひめきみ、かたちよききこえありて、しのびく御心さしありしかは、おとゝも「あらまほしきことにこそ」とて、へいしなといたさせ給て、ほゐのことくありしを、「かくおもはすに、やまうなとゝいふ事さへなく、かくなり給たる事」とてこがれたまふほとに

（法の師二ウ・10）

匂宮の子息三の宮が死去した直後の場面。「これ」は亡き三の宮、「内のおとゝ」は薫を指す。流布本の場合、薫が「忍び忍びの御心ざし」を持っていたことになり、版本付載の注釈書「抄」は、

双帝地也。巣守の巻に、薫のおとゞ、藤壺（＝宇治中の君）へ忍びてまいり給ひ「月影は」の哥つかうまつれりとみゆ。此花中書王（＝三の宮）は、薫の忍びて藤壺うみ給へりといふ事、いはずして知たり。

と注するが、「日本古典偽書叢刊」で「苦しい」とされているとおり、この解釈には無理があろう。たとえ薫と中の君とが密通して三の宮が出生したのだとしても、ここの破線部「あらまほしきこと」とは何を指すのかがわからない。ここは薫の小宰相腹の息女に三の宮が

密かに心を寄せ、それを薫も「あらまほしきこと」と考えていた、とある別本の形が本来であり、流布本には誤脱があると見るべきであろう。「日本古典偽書叢刊」でも脱落と見なされ、別本によって補われている。

【誤脱五】

㊫雪いたうふりしに、左衛門督ときしけか事をおとゝのえいし給ひしぞかし。

をしなへてつもるみゆきをなとされはわか身ひとつと聞わびぬらん（雲雀子一ウ・4）

㊥ゆきいたうふりしに、さゑもんのかみ時しげが一身つからひとりにもつもる雪かな」といへるをきゝ給ひて、こおととのゑいし給しそかし。

をしなへてつもるみゆきをなどされはわか身ひとつはきえわぶるらん（雲雀子一ウ・11）

「おとゝ」（㊥「こおとゝ」）は亡き薫を指し、その存命時を回想する場面。「左衛門督ときしげ」なる人物は『源氏』本編はもちろん『雲隠六帖』においてもここまで登場していないため、流布本の形では彼を見てなぜ「をしなへて～」の和歌を詠んだのかがわからない。ここは本来別本のように、「ときしげ」が頭に雪を積んでいる、すなわち白髪であることを独りごちたのを承けての薫詠と見るべきであろう。「日本古典偽書叢刊」は「底本（注・流布本）に誤脱あるか」と疑問を呈しつつも流布本の形のまま本文を提供しているが、ここは法の師巻と同様に流布本の誤脱と見て別本で補うのが望ましいと考えられる。

以上、五箇所について大きな誤脱と認められることを述べてきた。これらはいずれも流布本の誤脱であり、共通祖本から流布本が派生する過程で書写上のミスが起こったと考えられる。ただ、この他にも二系統の大きな本文異同は散見されるため、別本系にも大きな誤脱があったのをそれとわからぬよう補筆を行った可能性もある。しかしそれについては各系統の叙述の特色としてまた別の角度からの検討が求められよう。ひとまず以上の五箇所を二系統比較の第一段階として報告しておく。

二　敬語表現の強化 ―流布本系の特色（二）―

さて、次に二系統を細かな点で比較した際に、基本的な性格の違いとして目に付くことの一つが、敬語表現のあり方である。本物語は『源氏』の続編としての位置を強く意識しているものの、やはり成立の時代が下っていることもあってさまざま敬語表現の不備が見受けられる。もちろんそれは本物語に限ったものではなく、他の中世王朝物語やお伽草子などでもまま見うけられるものであるが、その中で流布本は、敬語への配慮が強いことがうかがえる。

【例一】

㊀山のみかどゝおほしき所に、しほたれたる御さまして御おこなひをし給ふ。御かたはらに、いはんかたなくきよらにあいぎやうづき給へる人のつゐゐ給ふ。「これや、わすれかたくおもひしつみ給ふたいのうへならん。こちたかりし御ぐしのいまもめてたくみえ給ふ。げにきやうさくなる人かな」とおもひ給ふほどに、うちおどろき給ふ。（雲隠五オ・1）

㊁山の御かとゝおほしき所に、うちしほたれておこなひをし給ふに、御かたはらに、いはんかたなくきよらにあいぎやうづきたる女君ありけるを、「これや、このわすれかたくしたまふたゐのうへならん。けにいときやうさくなる人かな」とおもひたまふほとに、うちおとろきたまひて（雲隠六オ・3）

光源氏の仏道修行に紫の上が同席している様を、冷泉院が夢に見る場面。傍線部アは光源氏の様子であるが、二重傍線を付したように、流布本の方が敬語表現を多用している。その差はイ紫の上の描写に顕著に出ている。まず別本では「あいぎやうづきたる」「ありける」と、まったく敬意が見られないのに対し、流布本は「あいぎやうづき給へる」「つゐゐ給ふ」と、繰り返し尊敬語を用いて表現するのである。もちろんここは続く冷泉院の心内語「これやこの」（㊀「これや」）によって、これこそがかの紫の上、と示され読者も気付かされるという叙述展開のため、別本はあえてその直前は単なる「女君」とするに留め敬語を用いなかったという可能性もあるが、二系統の表現に差異があることは確かである。また次のような例も存する。

【例二】

㊀女一の宮も、いまた御うしろみなともおはしまさず、みやす所の御はらのわか君・女二の宮なとのらうたけにおはしけるを、あはれと見たてまつり給ふに（巣守一オ・6）

㊁女一の宮も、いまた御うしろみなともなく、みやす所の御はらの姫宮・わかみやなとらうたけにておはするを見給ても（巣守一オ・10）

冷泉院が出家を意識するにつけ、皇子たちを案ずる場面。流布本が、女一の宮には御後見も「おはしまさず」、若君・女二の宮が幼いのをしみじみと見「たてまつり」なさる、と皇子たちへの敬語表現を意識的に用いていることは明白であろう。この他にも、

【例三】

㊀いまそとしころの（匂宮ノ）御こゝろさしのすくれ給けるほと、わか御心にもおもひしられ給ふらんかし。（巣守五オ・8）

㊁いまそとしころの（匂宮ノ）御志のすくれけるほと、わか御心にもおもひしられ給ふらんかし。（巣守六ウ・7）

【例四】

㊀（薫八）いとゝしく御心さしはなき事を、たゝみこの御心をうごかひ奉らんと思ひ給ふはかりなりしが、（巣守六オ・10）

㊁（薫八）いとしも心さしはなき事を、たゝ宮の御心をうごかひたてまつらんとおもふはかりなるに、（巣守七ウ・3）

のように、さまざまな箇所で流布本の敬語表現が確認できる。これ

らは【例三】が匂宮、【例四】が薫への敬意をそれぞれ表しているように、いずれも適切な敬語表現といえる。このため、本来流布本のように敬語が用いられていたのを、別本がその派生に伴いわざわざ取り除いたとは考えがたい。流布本が成立する段階で敬語表現に気を配り、不足がある場合は適宜加えていったと見るべきであろう。流布本の一つの特色といえる。

三　説明的叙述の増加 ―別本系の特色―

次に別本の基本的な性格の特色を見ておきたい。先にも少し触れたが、別本の特色の一つとして、説明的な叙述傾向にあることが指摘できる。説明的な叙述とは、文脈あるいは主体がよりわかりやすいよう言葉を補って説明を施すという描写のあり方をここでは意味する。その一つの表れが、先述した転換点の明示である。

【例五】

流（光源氏八）今も涙くみ給ふ、まことにあさからぬ御こゝろざしなりけり。六條院には、（光源氏ガ）おはせぬよしみつけたてまつりて、人〳〵さはぎもとめたてまつる（事カ）といへばさらなり。（雲隠三ウ・7）

別（光源氏八）いまもなみたくみたまふそ、まことにあさからぬ御心ざしなりける。さても六條院には、（光源氏ガ）おはせぬよし見つけたてまつりて、人々さはきもとめたてまつる事いへはさらなり。（雲隠四オ・6）

【例六】

流　おもひきやこの世なからに別れつゝ夢にこゝろをくだくべしとは
山には御ふたり（＝朱雀院、光源氏）こそり給ひて、世には物おもひ草の露しげくをきまさり給へるかとおもほえ侍へる人もありなまし。（雲隠五オ・9）

別　おもひきやこの世なからにわかれつゝ夢にこゝろをなくさめんとは
がくて山には御ふたり（＝朱雀院、光源氏）うちかたらひ給て、世中には物おもひのくさはひになり給へとも（雲隠六ウ・3）

【例五】では西山の朱雀院のもとで涙を流す光源氏の姿に続き、その光源氏出奔を承け六条院の人々が大騒ぎする様が描かれる。西山と六条院という二つの場の様子が連続して描出されるが、その間に別本では「さても」という話題転換の接続詞が挟み込まれている。また【例六】では、冷泉院が夢に光源氏の姿を見て「思ひきや～」の和歌を詠んだことに続き、山すなわち西山で朱雀院と光源氏とが過ごす様が描かれる。ここでも都と西山という二つの場の様子が続けて描かれるが、その間に別本のみが「かくて」という接続詞を用いていることがわかる。この直後にも別本は、

あるしの院は、かゝるかたにても、へたてなくてすくしたまふ、いとうれしき事におもひ給ける。がくてさがの院にも六條院にも一年に三たひはかりつゝさしのそきたまへとも、とかめたて

まつる人もなく（別雲隠六ウ・8）

と話題転換に際して「かくて」を用いているが、流布本はこれを欠く。この他に、

山の院にも人もおはせす。いまはむかしの御こともなつかしく、「れいぜんゐんにこそまいらめ」とてまいりて「しかくなん」と申けれは、中くふたゝびの御心まどひ、申もをろかなり。「さてもこの十年はかりまのあたりにおはしけるものを、ゆめにもしらさりけること」ゝたゝくれまとはせ給ふ事、いへはさらなりや。「さてもいまはの時、の給ひをきけることの葉などはなかりきや」とたつねたまへは（別雲隠一二オ・5）

＊流布本は二箇所ともに「さても」ナシ

のような例も見え、別本は話題の転換点を明示する傾向にあることが確認できる。こういった役割を果たす接続詞がもともと存したのであれば、それをわざわざ取り除くということは考えにくい。別本の派生に伴い、よりわかりやすい文章を志して補われたものと解釈すべきであろう。

また説明的な傾向が別の形で表れた例として、人物の明示が挙げられる。

【例七】

流「すかくし（あるしの院ノ殿カ）とおほしたち給ふもの」と聞えさすれは、

「源まほろしの身をしるからのこゝろもて夢てふ世をはすくしはてめや

かくおもひたち給ひてより、すくる月日のいとながう、おさなきとしのこゝちぞし給ひしを」なと申させ給ふに、

夢の世とおもひそむるやむらさきの根さへかれ野は風もたまらす（雲隠三オ・6）

別「なにたる御心にて、すかくとおほしめしたちたまふか」と申給へは、源氏

「夢の世にまほろしの身のむまれきてうつゝかほにてすくしはてめや

かくおもひたちしよりは、すくる月日もいとなかき心ちそせし」なとゝきこえたまへは、あるしの院

むらさきのうへをく露におとろきてはしめてゆめの世をやしるらん（雲隠三オ・8）

西山におけるあるじの院（＝朱雀院）と光源氏との和歌贈答の場面。別本はいずれも「源氏」「あるしの院」と詠者を明示し、それを欠く流布本では一首目（贈歌）に「源まほろしの」と光源氏を表す「源」という脇付けを施していることがわかる。別本は計三五首の和歌を有するがそのうち九首[10]に同様の形で詠者を明示している。これに対し流布本は、計二八首のうち詠者名を記すのは一首のみである。[11]この一首は別本にも共通するもので、

あるしのゐん

しはしたにもとのしつくととゝまらはするはの露のあとをことゝへ

うばそくのゐん

このほとはなにとかみてきするゑのつゆきえてののちのあと

をなけくは（別雲隠七ウ・4）

とあり、物語の中で和歌が二首連続する唯一の場面である。このためここは、詠者名を欠くと二首ともに朱雀院詠と誤読されることを考慮しての、例外的な表記であると考えられる。また和歌以外の部分でも、

【例八】

流「御弟子にまいり侍へらん。おなしくこゝなる人もろともに」とのたまふ。「すせうなる御事にぞ。おほやけにもさなからたのみたてまつらせ給ふ」（法の師五ウ・4）

別「いまは我も御でしにまいりはんべらん。おなしくこゝなる人ももろともに」との給へは、そうづ「すせうなる事にて侍とも、おほやけもさなからたのみたてまつらせ給ふ事なり」（法の師五オ・8）

のように主体が挿入されている例が存する。当該箇所がまさにそうであるように、版本の場合は脇付きという方法により主体を明示することが可能であるが、写本のみで伝わる別本はそのような方法を持たなかったため、必要に応じて人物名を挿入したものと考えられる。これは主体に限ったことではなく、

【例九】

流「このおとゝ（＝薫）は、むかしよりあやしきまていとこそたのもしう、なかくのはらからなとよりもうしろやすくみえ侍へりしか、いかに、をりくあはつけしと見らるらんと、みゆる時もそゝろにこゝろつかひせらるゝ人のこゝろさまにこそ」なとしりうこち給ふに（桜人五ウ・3）

別「このおとゝ（＝薫）のむかしより后（＝宇治中の君）にはあやしきまていとこそたのもしう、中くのはらからなとよりもうしろやすく見え給しか、いかに、おりくまろ（＝匂宮）をあはつけしと見らるらんと、見ゆる時もそゝろに心つかひせらるゝ人の心さまにこそ」などしりうこち給ふに（桜人五ウ・11）

のように、目的格を補った例もある。いずれも文脈理解の手助けとして人物を明示するものと解釈でき、別本の特色の一つといえよう。さらに別本は、接続詞や人物にとどまらず、解説のための言葉を補う傾向を持っている。

【例一〇】

流たとひこの世をかけはなれ給ふにたに、そことあらはしてこもり給ふは、むかし今おほかんなるを、「夢かとそおもふ」といひつらん（雲隠四オ・4）

別たとひ又世をすてたまふとも、いかなるたにのそこ・山のおくなとゝ、そこをあらはしてこもりゐ給ふ事は、むかしよりもあれはこそ、さい五かこと葉にも「ゆめかとそおもふおもひきや」ともいひつらめ（雲隠四ウ・7）

光源氏の出奔をうけ、都の人々が嘆き悲しむ場面。俗世を離れるにしてもせめてどこに籠もるかを明らかにしてくれていたら、という人々の思いが、『伊勢物語』八十三段を引き合いに出しつつ語られている。別本では、まず「いかなる谷の底、山の奥などと」と場所の例示をし、引歌についても「在五が言葉にも」と業平詠であることを明示したうえに、歌の第二・三句を引いて、よりわかりやすくしているのである。また次のような例も存する。

【例一一】

㊀いまだあけざるにおはしつきぬ。あるしの院おとろき給ひて、「いかなれば、またしかるべきほどを」とのたまひながら、はるかにひさしきたいめよろこびたもふ。（雲隠三オ・1）

㊁いまたあけさるにおはしつきたり。あるしのゐんおとろきたまふ事なのめならす。「いかなれは、かくしのゝめもまたしかるべきほとに」とのたまへは、はるかに久しき御たいめんを悦たまふ事かきりなし。（雲隠二ウ・8）

傍線部ウ～オの近接した三箇所にそれぞれ別本が言葉を多く費やしている。まずエは流布本が単に「まだし」と語るところを別本は「かくしのゝめもまだし」と〈朝〉早いことを述べている。これはその前文で「いまだ明けざるに」到着したとあるのを承けてのものであり、必ずしも「しのゝめ」という時間帯を表す語が不可欠なわけではない。しかし流布本で本文を提供する「日本古典偽書叢刊」において当該箇所に「早朝なのに」と注が付されていることからも明らかなように、流布本ではやや言葉足らずという感も否めない。別本のほうがよりわかりやすい表現であるといえよう。これに類する例としては、

かくて二日はかりおはして、いとたうとき御ありさまにてそはてさせ給ける。いとゝ、たゝ御ひとりになりたまへは、まきるゝこともなうそおこなひつとめたまひける。（㊁雲隠八ウ・4）

「かへりては、ほとけの御心にもたかひやし給はん」とおもひ侍る。「いかゝ」ときこえ給へは、「それはこのほどおりく申きかせ侍」（㊁法の師五ウ・10）

のような箇所が挙げられる。いずれも流布本が二重傍線部を持たない例である。前者は朱雀院亡き後の光源氏の様子を描く場面であるが、源氏が「紛るることもなう」勤行に励む理由が別本では明記されている。直前に朱雀院の「果て」の様を記しており二重傍線部がなくとも理解できるが、よりわかりやすくなっている。また後者は出家を望む薫と僧都との対話場面で、別本は二重傍線部を有することにより会話の転換点がわかりやすくなっている。流布本の場合、文脈から見てここで会話の主体が変わることは読解できるもののやわかりにくく、「このほとおりく聞えさせ給ふ」（六オ・3）のように「薫ノ詞」という脇付けが施されている。また「日本古典偽書叢刊」でも「薫の言」という注を要している。いずれも流布本が誤脱あるいは意図的に省略した可能性がないわけではないが、別本が説明の言葉を補ったと見るほうが自然であろう。

これに対し【例一一】の傍線部ウ・オはやや事情が異なり、朱雀院の驚きあるいは喜びの気持ちが並々でないことを強調するものである。この場合は文章理解の難易度に関わるものではないが、このように流布本に比して別本がより多くの言葉を心情描写に費やしている例は他にも見受けられる。

何しにかみをそり世をそむきたる身そやとわれなからなを心えがたくて（別雲隠一〇ウ・3）

すくせのほともくちおしからずとおもひたまへはいとゝほゐをとけむ事はかたくのみおもひなされ給ふ（別法の師一オ・10）

それぞれ前者は光源氏、後者は薫の心情を描いたもので、どちらも流布本は二重傍線部を持たない。これらの表現を欠いても物語の文脈上問題がなく、別本が心情描写を増補したのかあるいは流布本が簡略化したのかは明らかでないが、これまで検討した傾向と合わせ別本がより説明的叙述を持つという特色の一部として位置付けられよう。

おわりに

以上、本稿では二系統の基本的な性格の差異について検討してきた。今一度まとめておくと、

〈流布本系〉

・比較的大きな誤脱が五箇所存する。

・待遇表現に敏感で、敬語が増補されている。

〈別本系〉

・文脈をよりわかりやすくするための説明的叙述が増補されている。

という点が、各本文の特色として指摘できる。これらは細かな描写の差異であり、ここから二系統各本文の方向性などを看取することは難しいが、今後さらに物語の表現性や大きな本文異同箇所についての検討と結びつけて考えることにより、各本文がそれぞれどういう意図をもって祖形を改作し、新たな物語として派生していったのかを明らかにしていきたい。

【注】

（1）これまで流布本・普通本、別本・異本などさまざま称されてきたが、本稿では版本とその書写本を流布本系、写本のみで伝わるものを別本系と呼んでおく。

（2）山岸徳平・今井源衛氏「『雲隠六帖』解題」（『宮内庁書陵部蔵青表紙本源氏物語』『山路の露・雲隠六帖』昭45・新典社）、吉田幸一氏「『雲かくれ六帖』小考」（古典文庫『源氏雲隠巻』平2・古典文庫）

（3）拙稿「『雲隠六帖』伝本二系統の関わりについて—識語を視点として—」（『国語と国文学』第82巻7号〈平17・7〉に掲載予定）。あわせてご参照いただければ幸いである。

（4）後藤康文氏『狭衣物語』本文の機械的脱漏について—大系本

・全書本本文の対比を軸に―」（『論叢狭衣物語1　本文と表現』平12・新典社）

(5) 以下、本文の引用は、流布本系は上方版無刊記九冊本、別本系は愛知県立大学附属図書館蔵本により、依拠した本文系統および引用箇所の所在を、引用末尾の（　）内に、本文系統の略号（流布本系＝㊀、別本系＝㊁）・巻名・丁数およびその表裏の別・行数の順に記す。引用に際しては、私に句読点を施す。

(6) 「日本古典偽書叢刊」（今西祐一郎氏校注　平16・現代思潮新社）では①の部分について「以下の本文、文意不明瞭。『うちの帝』は『ちちの帝』の誤りで、今上帝の父朱雀院をさすか」と注する。一つの可能性として考えられないわけではないが、この直前には薫の浮舟引き取りと還俗が、直後には今上から匂宮への譲位が描かれており、ここで朱雀院が回顧されるというのは唐突であろう。

(7) 以下、『源氏物語』の引用は「新編日本古典文学全集」による。

(8) 匂宮をいずれ帝にという今上と中宮の思いは一度ならず語られている。

・帝、后も心ことに思ひたまへる宮なれば、おほかたの御おぼえもいと限りなく（椎本⑤一七〇）

・なべてに思す人の際は、宮仕の筋にて、なかなか心やすげなり、さやうの並々には思されず、もし世の中移りて、帝、后の思しおきつるままにもおはしまさば、人より高きさまにこそなさめなど（総角⑤二九〇）

・「筋ことに思ひきこえたまへるに、軽びたるやうに人の聞こゆべかめるも、いとなむ口惜しき」と、大宮は明け暮れ聞こえたまふ。（総角⑤三〇二）

(9) 版本は上方版・江戸版ともに本物語の注釈書を付載しているがその名称は一定していない。今仮に「抄」と呼んでおく。以下、「抄」の引用は上方版無刊記九冊本による。

(10) うち一首は愛知県立大学蔵本と早稲田大学蔵本で詠者名を欠く。

(11) 流布本には物語末尾に尚侍詠が一首あり、それを含めれば計二九首、うち詠者名明示が二首となるが、この尚侍詠は特殊な性格を有しており物語内の詠歌とは認めがたいため例外として扱う。尚侍詠の性格については前掲注（3）拙稿で論じている。

(12) 『伊勢物語』第八十三段「忘れては夢かとぞ思ふおもひきや雪ふみわけて君を見むとは」（『古今和歌集』巻第一八、雑歌下、九七〇番歌）。

――おがわ・ようこ、広島大学大学院博士課程後期修了――